

茶庭の動線の変遷と出雲流庭園

「庭園文化研究分科会」 武田 隆 司

1. はじめに

「出雲流庭園 その歴史と造形（昭和50年）」では菅田庵の庭が出雲流庭園の発祥とされている。何をして出雲流庭園の発祥となるのか。確かに同書にもあるように、短冊上の延べ段、敷き砂と高く打たれた飛び石によるシンプルな枯山水など特に向月亭間前の庭は現在の出雲流庭園との共通点を見ることができる。菅田庵についていくつかの書籍や研究論文を読むうちに、作庭に関わった松平不昧公が影響を受けたとされる、ともに大名茶人の片桐石州と小堀遠州とそれぞれが作庭した慈光院庭園と孤篷庵庭園にさかのぼることになった。これらの庭は江戸時代初期の茶庭であるが、それまでの千利休などによる露地と言われる侘びの茶庭から大きな変化を遂げたものとされる。もともと茶庭は「用の庭」と呼ばれ「景の庭」と呼ばれる観賞を目的とする庭とは一線を画した茶事を前提とした庭である。すなわち茶事の流れに沿った構造となっており、茶事の変遷により「人の動線」、「庭の構造」、「観賞方法」も変化してきたようである。今回は出雲流庭園の発祥とされる菅田庵に至るまでの「茶庭の動線」の変遷について文献を参考に整理するとともに、それ以降江戸末期に不昧公も訪れたとされる本陣の庭、それを手本としたとされる明治以降に作庭された豪農屋敷、そして現在の出雲平野の民家の庭に至るまでの変遷について考察する。

菅田庵（向月亭前庭）

出雲流庭園（出雲文化伝承館）



2. 室町以前の茶事

日本における喫茶の風習は、記録上では平安時代にさかのぼる。鎌倉時代には禅宗寺院を中心に喫茶の風習が広まり、室町時代には「会所」において茶がふるまわれていた。この時代の「会所」とは公家や有力武将、高僧といった上流階級による連歌会などの寄合が行われた建物を指す。会所では、主座敷の裏手に「茶湯所」という部屋で茶を立て、座敷に運んでいた。こうした座敷が、床（とこ）、棚、付書院などを伴った書院造として定式化していくとともに、「書院の茶」と呼ばれる茶の文化が広まっていった。「喫茶往来」（室町時代の茶事、喫茶に関する書）によると、茶室は、二階建てで、四方に窓があり、室内は明るく、周囲には白砂が敷かれた「書院庭園」が設けられていた。

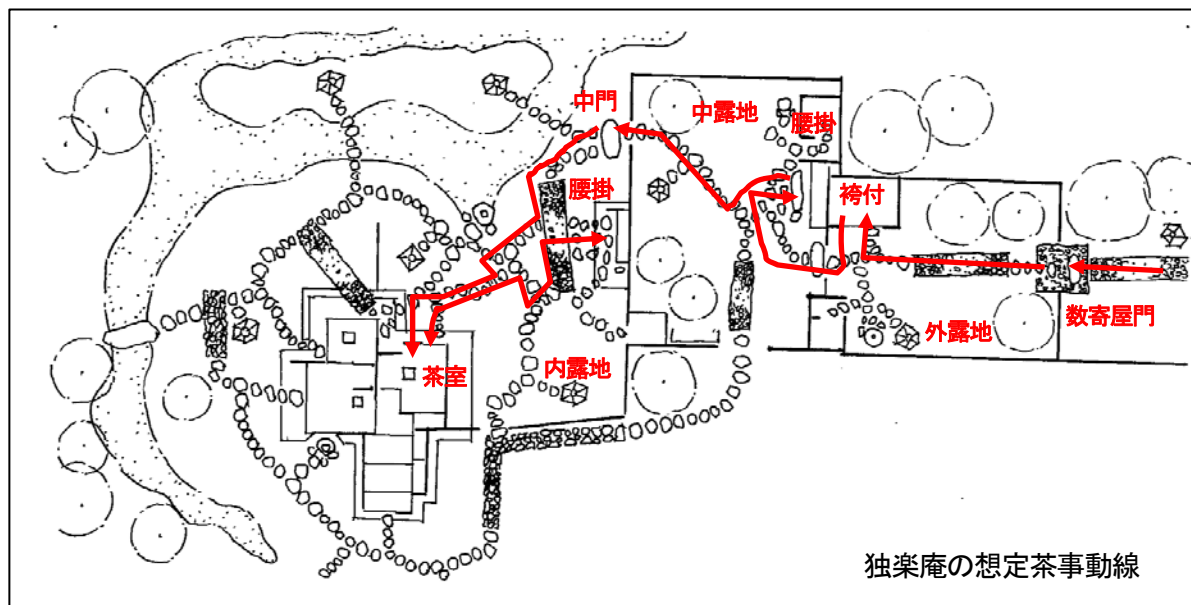
当時の茶事の流れは、客が来るとまず酒、料理などでもてなし、その後庭を眺めながら休息をとり、やがて茶会の開始にともない二階へ上がる。このころは闘茶（茶の産地を当てあうもの）がはやっていた。闘茶が終わった後は、料理が出て酒を飲み、管弦により歌ったり舞ったりという宴会が深夜まで続くというものであったようだ。鹿苑寺金閣、慈照寺銀閣などもこのような茶亭として使われていたとされる。上階からの庭の眺めを楽しんでいたであろう。茶事の動線は建物内部のみの移動となり、庭の観賞も建物から、すなわち「書院観賞式」となるが、1階からの眺め、2階からの俯瞰、また縁に出ての観賞など、建物内の視点の移動は見られる。

3. わび茶の頃の茶事

15世紀後半から16世紀（室町中期～後期）にかけて、「市中の山居」（都会にいながらにして山里の風情を味わう）を志向する「草庵の茶」（侘び茶）へと移行していく。

千利休は、三畳、二畳の草庵茶室を創出し、躡口（潜り）を構え、わび茶を大成させたといわれている。また露地に中門を設け、外露地と内露地に分け、内側を超俗の世界と規定したという。利休が建てたと伝えられる茶室のうち、宇治の田原に建てた「独楽庵」は、その後松平不昧が江戸の大崎下屋敷に築造した11棟の茶室を備える2万坪あまりの広大な茶苑の中心的な茶室として復元された。現在は、出雲文化伝承館に復元されている。

独楽庵で想定される茶事の動線は下図のとおりである。数寄屋門から外露地に入り、袴付けで準備を行い中露地の腰掛待合で待ち、内露地に入り茶室に至る。懐石等をいただいた後に一度中立で外に出て、内露地の腰掛で待つ。再度茶室に入り、茶等をいただくものである。このころの茶庭（露地）は基本的には伝いの庭であり、観賞を目的とするものではない。



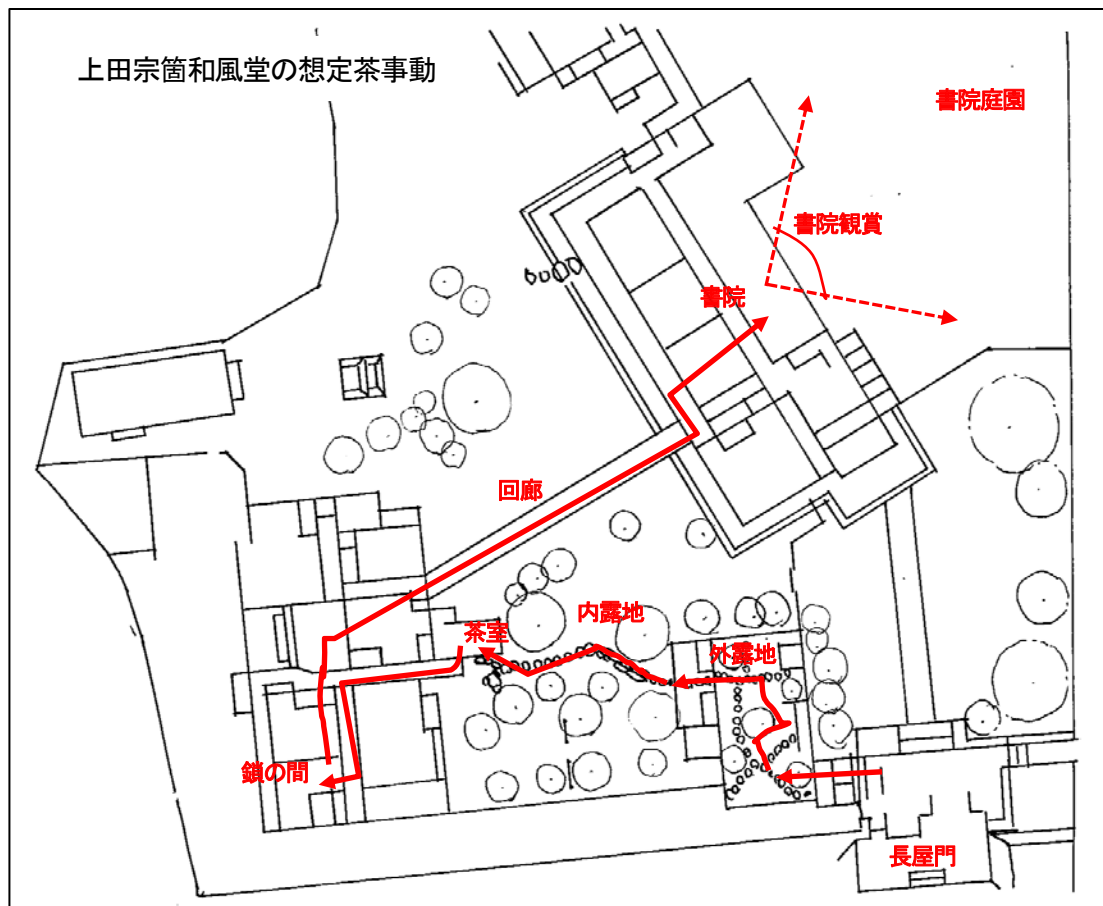
4. 古田織部、上田宗箇の庭

江戸時代に入ると、茶の湯は全国の大名たちによって嗜まれるようになる。古田織部（1543～1615）は、3万5千石の大名であり、千利休の高弟として優れた茶人でもある。利休は点前のための場として茶室をあえて狭く閉鎖的に作ったが、織部は茶室を広く明るく開放的なものにした。切り石による飛石などは織部が最初とされる。また織部は茶庭を道すがら

観賞することに加え、茶室内からの観賞にも対応するものとしてとらえ、用の庭から景の庭へ転回することになる。

このころの茶事の動線として注目すべきは、「鎖の間」である。鎖の間は小間の茶室と書院の広間をつなぐものであり、これが茶庭（露地）と書院庭園の一体化につながるものとされる。鎖の間を持つ現存の庭として広島市に茶道上田宗箇流和風堂に復元された書院屋敷がある。上田宗箇（1563～1650）は古田織部に師事した武将茶人であり、数寄屋御成（茶道による藩主の接待）の作法による武家茶道の茶庭を各地に作庭している。江戸初期に広島に入り、家老として自らの屋敷に藩主の御成を迎えた。

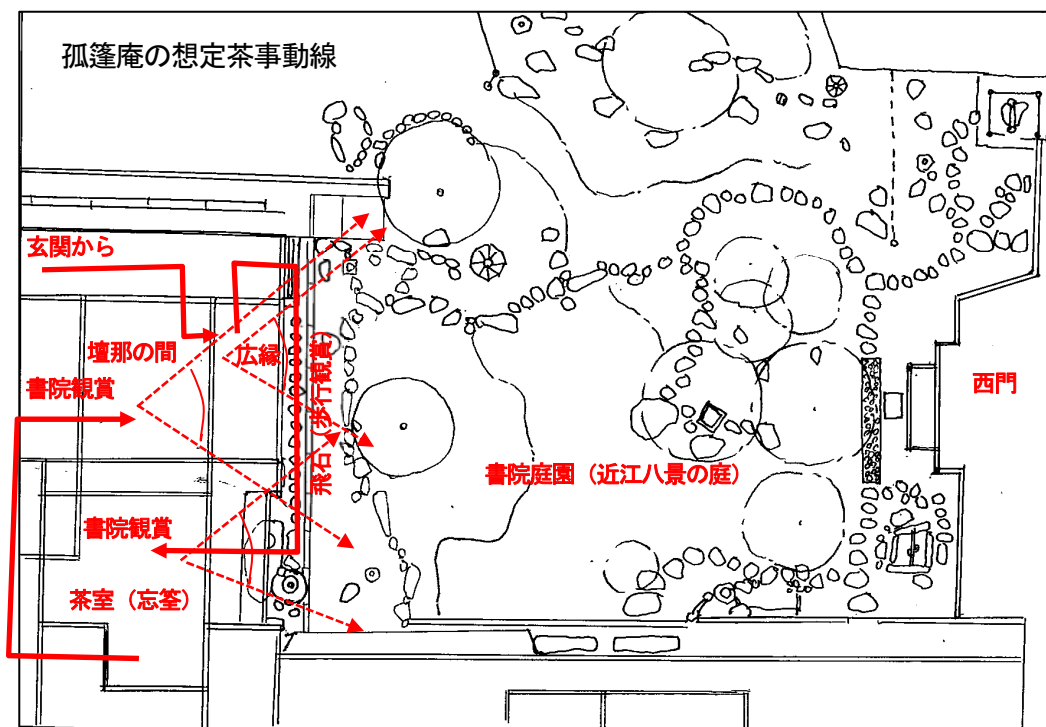
下図のとおり、藩主は長屋門を抜けて、外露地に入り、中潜りから内露地へ、茶室「遠鐘」で濃茶ののち「鎖の間」で薄茶をいただき、長い渡り廊下を経て、2階建ての書院屋敷に通され、藩主は2階から眺望を楽しんだり、料理の振る舞いを受けたりした。階下の広間では能を鑑賞したされる。室町時代の御成は、御成門から将軍が入ったとされるが、江戸時代になると御成門から入らず、狭い数寄屋門から外露地に入るようになったようである。



5. 小堀遠州と孤篷庵

江戸時代を代表する大名茶人小堀遠州は（1579～1647）、南禅寺（京都）、二条城庭園（京都）、仙洞御所（京都）、頼久寺（岡山県）など各地に名園を残している造園家でもある。遠州は古田織部の弟子の中でも最も優れた弟子とされ、「きれいさび」と称されるように利休の侘びをさらに緩め、草庵のわび茶から書院の茶の傾向を強めた。遠州の茶会は小間の茶室から鎖の間、書院、さらに茶屋などと連携して行う形式をとった。代表的な茶庭「孤

「蓬庵」(1613年建立)は1793年に焼亡するが、1797年から12年をかけて松平不昧の協力により復元された。孤蓬庵は京都にある臨済宗の寺院であるが、方丈や書院の他にいくつかの茶室からなる。庭も枯山水の方丈庭園や露地など複数の様式のものがある。この孤蓬庵に遠州のわび茶と書院の茶の融合を見ることができる。注目すべきは「忘筌」という書院の茶室とその前庭である。明かり障子の下半分の吹き抜けから庭を觀賞することができる書院庭園「近江八景の庭」は、控えの間となる「壇那の間」の広縁からは軒下の犬走りに打たれた飛石を伝って「忘筌」茶室に入る露地の要素も持っている。茶事の動線は下図のとおりである。歩く庭(露地)と建物から觀賞する庭(書院庭園)を重層化している点の特徴とされるが、書院からは飛石を見せることはせず、完全な一体化までは至っていないようである。しかし犬走りの飛石は歩きの中で見せる景物となっていることは慈光院や菅田庵にもつながるものである。これは「動的な鑑賞」=「歩行觀賞」ともいわれる。

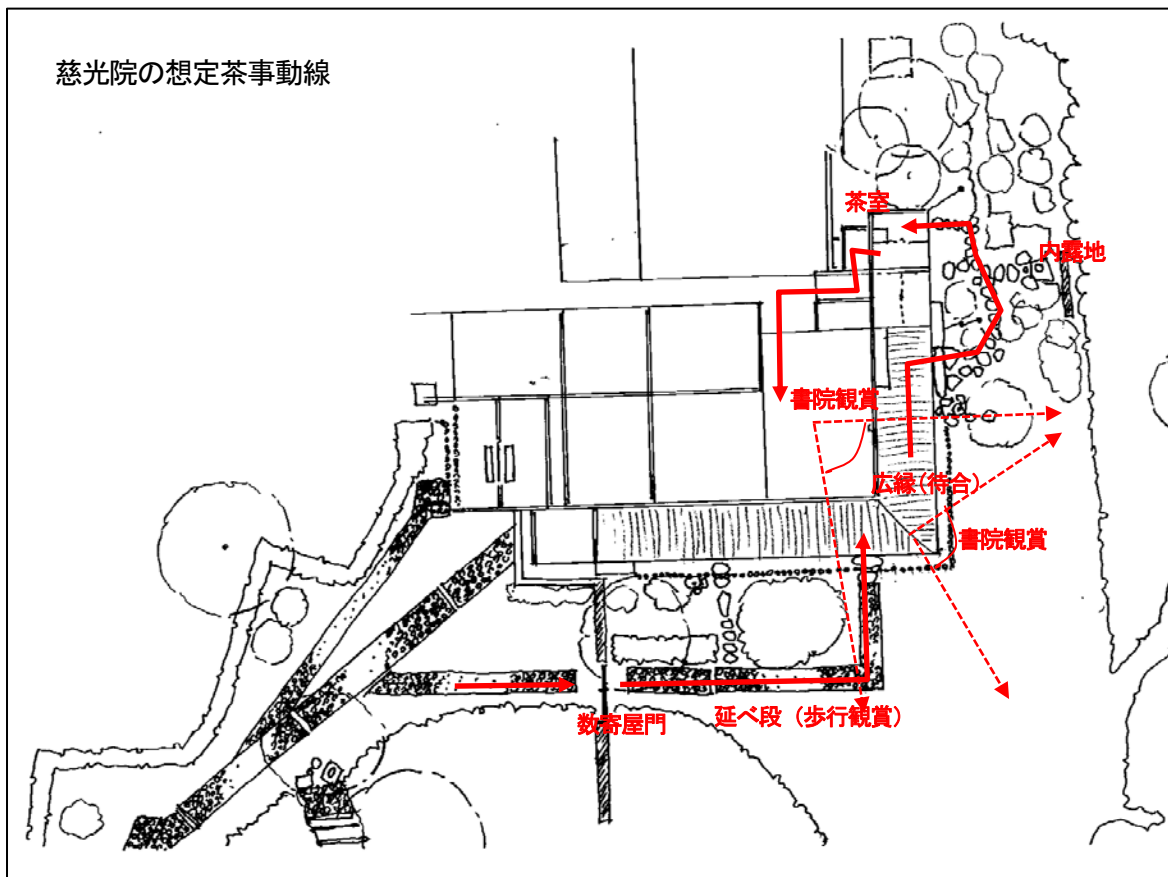


6. 片桐石州と慈光院

大和小泉藩主であった片桐石州(1605~1673)は茶道に通じ、遠州亡き後將軍家の茶道の指南役になるまでとなった。石州の茶は、草庵の茶と大名的な華やかさを併せ持つ茶を目指すものであり、茶室や茶庭にもこのよう考えが表れている。その代表作でもある慈光院は父の菩提のために1663年に創立したもので、境内全体が一つの茶室として造られている。大和平野の丘陵の頂上部に作られた書院の13畳の間からは大刈込越しに大和平野とその先に春日連山が遠望され、庭の大きな見どころとなっている。このような立地は菅田庵とよく似ている。数寄屋門から入った書院前の主庭は敷き砂による枯山水であり、そこには客間に向けて見事な延べ段がつくられている。また書院座敷の北側には2畳台目の茶室が設けられている。内露地は築地塀により囲まれ、眺望を遮った草庵のわび茶の庭としている。

文献によると、茶事の動線は下図のとおりである。数寄屋門を入ると見事な延べ段が書院

まで誘う。ここは茶庭でいうと外露地的な空間となるが、歩きながらの観賞の庭となる。その後広縁に上がり、ここから庭を観賞しながら待つ。その後東側の沓脱石から内露地に降りる。ここは遮蔽的な露地空間（用の庭）となる。その後草庵の茶室に入りわび茶を喫し、そのまま大広間に移り点茶を喫す。またその後宴席となったかもしれない。ここからは枯山水の庭と刈込越しの眺望を楽しんだと思われる。広間からは孤篷庵の忘筌と同様に前述の延べ段は見え、露地的空間と書院庭園を完全に併用させているというところまではいっていない。また外露地空間と内露地は直接連絡しておらず、書院を介して移動する仕組みとなっている。



7. 菅田庵

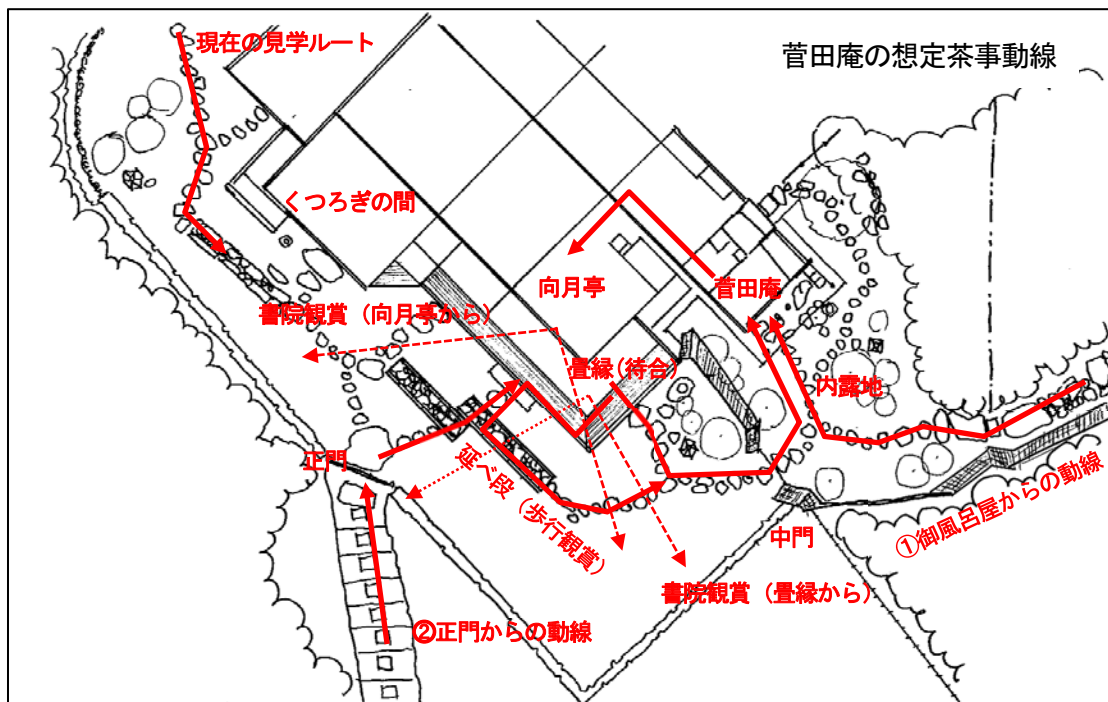
菅田庵（茶室）などの建物や庭を含む有沢山荘一帯は、当時の松江藩家老有沢家が初代藩主松平直政より拝領したものであり、その後1792年に7代藩主治郷（不昧）により今のような形に整備されたとされる。本来は茶室のみが菅田庵であるが、向月亭や御風呂屋、その他の建物や庭園、周辺の山林も含めた山荘一帯が一般的に菅田庵と呼ばれており、国の名勝にも指定されている。不昧は「総絵図」を作り、敷地全体の基本計画をたてたとされる。前述のとおり不昧が独楽庵を品川の下屋敷に復元したのは1806年、焼失した孤篷庵を再建したのは1797年で利休や遠州への敬愛の念がうかがえる。また眺望に優れた立地や庭の構成などは慈光院によく似ており、これは不昧公、有沢氏とも茶道石州流の門下であったことによるものともいわれている。

「菅田庵保存活用計画報告書」によると現在の西側受付からの見学ルートは管理の都合上のものであり、本来の茶事のルート①は、御成門から御成道を通り坂道を上り御風呂屋に至

り、この風呂で汗を流して菅田庵（1畳台中板）に入ったとされる。その後建物内を移動し、向月亭の書院の間に入り、庭と眺望を觀賞しながらの書院での呈茶、また宴を楽しんだのであろう。一方昭和を代表する造園家、重森三玲は「日本庭園史大系」の中で、向月亭正面の正門②が入り口であるとしている。確かに正門を入るとひと際大きな飛石とそれに続く見事な延べ段が向月亭に誘うように配されている。

茶事の想定されるルート②は次図のとおりである。正門を入り飛び石を伝って待合となる畳縁に上がる。ここで待ちながら庭や眺望を觀賞したのちに向月亭の東側の落ち縁付近から飛石に降り、中門を潜り内露地に入り菅田庵の茶室で茶を喫する。その後向月亭の上の間に移動して再び茶を喫す。ここからは再び向月亭前の庭と松江市街地を一望する景色を觀賞するというものである。ここで注目すべきは向月前の庭の飛石が直接菅田庵の内露地に連絡しているということである。これは慈光院にも見られないことであり、書院庭園と露地の融合の完成形と評価する文献もある。客は正門から入り、直接内露地に向かうことは考えにくい。向月亭正面の2か所の沓脱石のどちらかから一度書院に上がり、茶事の準備が整い次第また正面から降りて内露地に向かったかもしれない。出雲流庭園の書院の沓脱石が2か所以上あるのはこの名残なのかもしれない。しかも沓脱石は加工したものと自然石を組み合わせたものが多く、使い分けが行われていたのかもしれない。

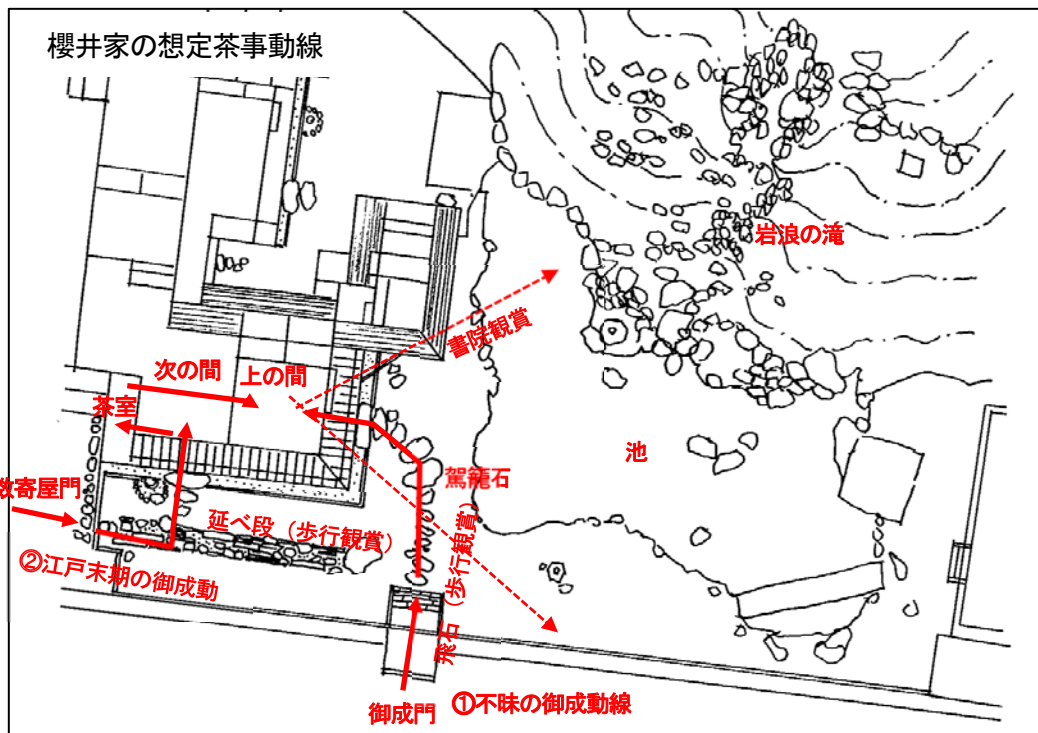
向月亭前の庭は、開放的な平庭の枯山水であり敷き砂の中に飛石と延べ段が配されたシンプルな庭であり、その様式が出雲流庭園のデザインのもとになったとされる。この庭のシンボリックな存在の延べ段の縁部の青竹は、茶事や行事が行われる度に据え直されていたとされ、細竹細工で作られた落ち縁との連続性も意識したのではないかとされている。また、向月亭の庭は菅田庵の内露地に対して外露地の役割も持ち、飛び石を伝っていくとき、座敷に座って見る庭とは別種の美しさを見るものを感じさせる。つまり茶庭の外露地という用の庭でありながらも、歩きながら觀賞する庭であり、なおかつ書院觀賞の庭であるということである。これは現在の出雲流庭園の空間構成にも通じるものであると思われる。



8. 本陣庭園の動線について

松江藩では藩主が領内を巡察する際に利用した宿舎が「本陣」と呼ばれ、主要街道に面した豪商や地主、たたらにより財を成した富裕層の屋敷が充てられていた。書籍「出雲の御本陣」によると、「藩主は本陣に到着すると、駕籠に乗ったまま御成門から庭園に入り、御成座敷で過ごした。なお出立も庭園を通り、御成門から街道に出た。」とされる。御成の際に駕籠を降りたとされる大きな石（駕籠石）はこのころからのものとされる。江戸期には前述の上田宗箇の庭のように「数寄屋御成」と呼ばれ門から直接庭に入り露地を通り茶室に御成するようになったとされるが、これまでの武士の茶事との決定的な違いは接待する側が領民であるということである。本陣では茶室での呈茶は供されていない。茶道では主客が小間で同座することを基本とするが、公的には領主と領民が同座できなかったため、別の部屋で点てたお茶を御前に運ぶのである。のちに家老クラスへの御成の時は、小間の茶室でのおもてなしで、同座して相伴ができたとされる。

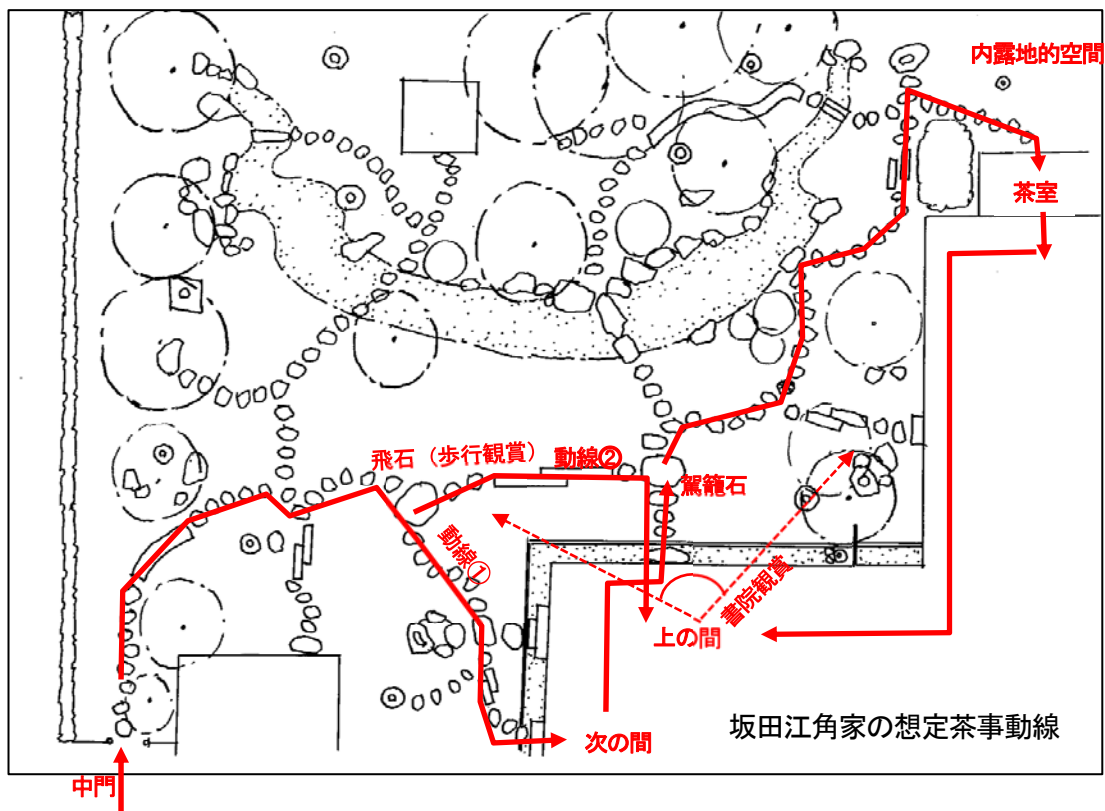
本陣の庭の中でも、松平不昧の御成があったとされる櫻井家庭園についてその茶事の動線を考察する。不昧の御成は1803年とされこれに合わせて庭を改修された。裏山を活用した瀑布は不昧の興を誘い「岩浪の滝」と命名され、庭も不昧好みの庭に設えられたと思われる。御成（茶事）の動線は下図のとおりである。まず不昧の御成の動線①であるが、家伝によれば、御成門から駕籠のまま庭に入りあるいは歩いて入り、飛び石を伝いながら庭を觀賞する。その後沓脱石から上の間に入り別室で点てられた茶を喫しながら、書院から庭を觀賞することになるのであろう。また玄関わきの門から上の間の南部の通路にある延べ段は1856年の10代定安公の御成のために作られたものとされるが、②数寄屋門から入り、延べ段を伝い沓脱石から次の間に入り茶に準備ができたなら隣の3畳の茶室で茶を喫し、その後上の間に移り茶や酒宴などを楽しみながら庭を觀賞したのであろう。このころは相伴が許されていたのかもしれない。なおこの延べ段は主庭までは連絡しておらず、歩きながらの見通しの觀賞となる。この点は石州の慈光院の空間構成に近い。



9. 出雲流庭園の想定茶事動線

1) 豪農屋敷の庭

本陣では、藩主御成の座敷をそのままの状態で開催して、文化意識の向上に供することを「跡見」と称した。このことが後の地方文化の向上に寄与し、やがて明治維新を迎えて出雲文化のおもてなしとして一気に開花したとされる。出雲平野の豪農や地主なども茶道による接待のお手本としたのであろう。明治になると庶民にも庭を造ることが許され、出雲流庭園が本格的に形成される時期となる。下図は豪農屋敷の想定される茶事の動線を坂田江角家（明治29年作庭）について考察したものである。菅田庵や本陣の庭の動線を参考に想定すると、①まず中門から入り飛石を伝い開放的な書院の庭と飛び石、短冊石を歩行の中で観賞し、書院の南面の沓脱石から次の間に入り待つ。茶事の準備ができると書院の西面から再び庭に降りて駕籠石を通り飛石を伝って北西の奥座敷の小間の茶室に入る。茶を喫してから廊下を歩いて上の間に入り、庭を観賞しながらまた茶を喫す（あるいは宴に入る）。上の間の茶会であれば、②駕籠石から直接上の間に入ったかもしれない。露地的な歩行空間と書院庭の併用、外露地的空間と内露地的空間との連続性、歩行観賞と書院観賞への対応など、菅田庵との共通点が見えてくる。このように考えると一般に「中門」と呼ばれる門はこの庭ではむしろ外露地に入る数寄屋門ととらえたほうがよいとも思われる。

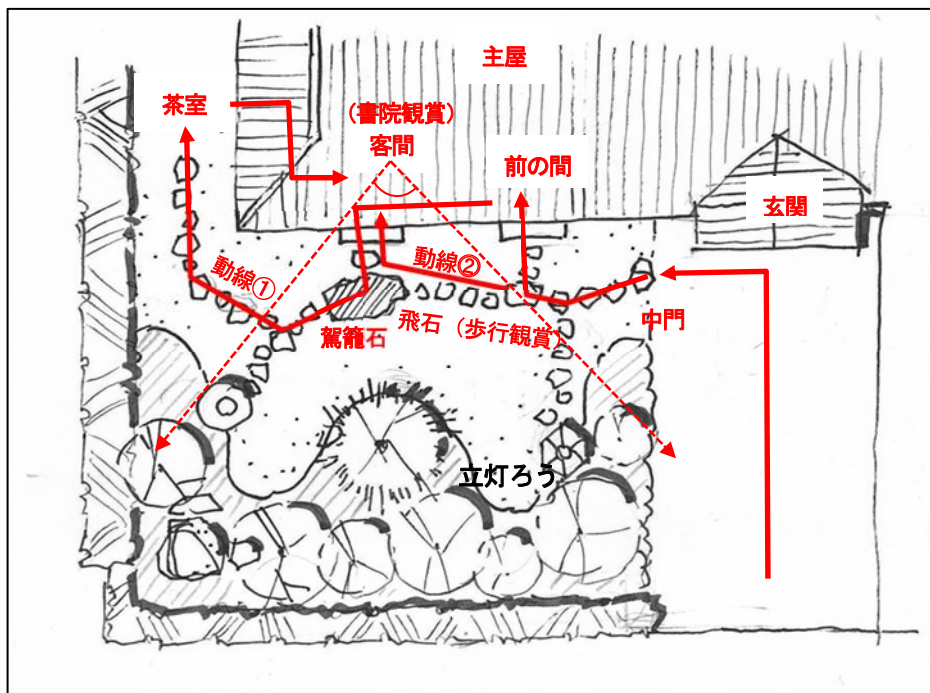


2) 現在の一般的な出雲平野の庭

豪農屋敷の庭をお手本として作られるようになった出雲平野の民家の庭は、現在もっとも多く存在するいわゆる一般的な出雲流庭園である。これらは戦後から作られるようになった。コンパクトな敷地の中でも灯ろうやつくばい、飛び石など忠実に豪農屋敷の庭を再現している。今では飛石を歩行することはハレの日以外にはないとされるが、茶事を想定した動線を考察してみる。①まず玄関へのアプローチから分岐した中門（数寄屋門）から庭に入り、

飛び石を伝って客間（大きな家では前の間）に上がり、茶席が整うのを待つ。準備が整うと再び沓脱石から庭に降りてかつてはあったであろう主屋の西奥の茶室に向かいお茶をいただき、縁側を通して客間に戻り再度茶を喫するというものである。②茶室がない場合はそのまま客間に入ることになるだろう。現在ではそのような茶事の意味は知られていないかもしれないが、菅田庵からの茶事動線は主屋を平行に通過する飛び石の形態にも表れている。また庭は歩行中での観賞、また客間から観賞にたえる様式になっていると思われる。

＜一般民家の想定茶事動線＞



10. まとめ

室町の庭から現在の出雲流庭園まで、茶事動線、空間構成、観賞法を一覧にまとめる。

室町～江戸の庭	茶時動線	庭の空間構成	庭の観賞方法
室町以前の庭	広間→休憩→広間(2階)	書院庭園のみ	建物からの観賞
わび茶の茶庭 (室町末～安土桃山)	門→外露地→内露地 →茶室→中立→茶室	外露地、内露地	露地、茶室とも観賞しない(用の庭)
上田宗箇の茶庭 (江戸初期)	門→外露地→内露地 →鎖の間→広間	外露地、内露地、書院 庭園の共存	露地は非観賞、広間から 書院観賞
小堀遠州の孤篷庵 (江戸初期)	玄関(or外露地)→書院→ 軒下露地→茶室→広間	露地と書院庭園の重層 化の始まり	歩行(動的)観賞、茶室、 広間からの観賞
片桐石州の慈光院 (江戸初期)	門→書院庭→広縁→内露 地→茶室→広間	外露地と書院庭園の重 層化、内露地は別	歩行(動的)観賞+建物から の観賞(延べ段含まず)
不昧の菅田庵 (江戸後期)	門→外露地→畳縁→外露 地→内露地→茶室→広間	外露地と書院庭の重層 化、内露地と連絡	歩行(動的)観賞+建物から の観賞(飛び石込)
本陣庭園 (江戸後期)	御成門→庭→上の間or 門→露地→茶室→広間	外露地と書院庭園の重 層化、内露地的空間	歩行(動的)観賞+建物か らの観賞(飛び石込)

出雲流庭園	茶時動線	空間構成	庭の観賞方法
豪農屋敷の庭園 (明治時代)	中門→庭→一次の間→庭→ 茶室→上の間	外露地と書院庭園の重 層化、内露地と連絡	歩行(動的) 観賞+建物から の観賞 (飛石込)
現在の出雲平野の庭 (昭和、戦後)	門→庭→客間→庭→茶室 →客間	外露地的空間と書院庭 園の重層化	歩行(動的) 観賞+建物から の観賞 (飛石込)

このように茶事の動線に注目してみると、出雲流庭園はやはり茶庭の機能が息づいており、飛び石についても単なる景物ではなく、極めて機能的な配置になっているといえる。客間を横切るように平行に並べられている飛び石の配列も出雲流ならではの特徴であるが、出雲流庭園が茶庭の影響を受けているということで納得できる。庭の空間構成については、江戸初期の小堀遠州、片桐石州の頃から露地と書院庭の重層化が始まり、その完成形が菅田庵の庭であり、これが出雲流庭園の下地になっていると思われる。出雲流庭園は書院庭園なのか茶庭なのか様々な見解があり、前述の「出雲流庭園 その歴史と造形」では「茶庭の雰囲気を持つ枯山水の庭」と表現されているが、むしろ「茶庭(露地)と書院庭園の併用型の庭」としたほうがしっくりするような気もする。観賞方法については、現在は書院観賞の庭とされ基本的には庭に降りて観賞することはないようであるが、本来は菅田庵のように飛石を伝い歩く視点の移動の中で観賞すること(歩行観賞)を想定していると思われる。そして建物からも座視観賞、縁側に起立した観賞等異なる視点からの観賞にも耐えるような設えとなっている。出雲流庭園は多様な観賞ができる庭と言えるであろう。

出雲流庭園は不昧公由来、さらに片桐石州、小堀遠州、千利休から脈々と続く茶の文化が息づいており、単なる出雲平野の農家の庭ではなく文化性の高い庭であるといえるのではないかと感じている。

<参考文献>

- ・出雲流庭園<歴史と造形> (1975 小口基実、戸田芳樹)
- ・格式と伝統 出雲の御本陣 (2009 藤間 享)
- ・わび茶と露地(茶庭)の変遷に関する史的考察 (1990 浅野二郎、仲隆裕、藤井英二郎)
- ・日本庭園史大系15, 21, 25 (1972 重森三玲、重森完途)
- ・茶道の庭 (1972 福田和彦)
- ・史跡及び名称菅田庵保存活用計画(案) (2016 松江市)